

教育フォーラム「不登校を考える」
不登校・ひきこもりと地域に求めらるるもの
〜子どもと歩む保護者たちの思いに寄り添って〜

【日時】2019年1月26日(土)午後2時〜4時30分

【会場】ひかりプラザ (203' 204号室)

【講師】広木 克行さん (神戸大学名誉教授)

【参加者】73名

(前回のひきこもり子どもたちに非があるとは思えない。いじりたちが通えなくなる学校というのはいやあといった何なのだろうと考えてしまっわけです。

今学校は、大丈夫なのだろうか――。

(中略)

心配なことを数え出すときりがありません。でも私がいちばん不安に思っているのは、もっと端的なものでした。

学校に行かなければ死なずに済む子どもが、いんなにたくさんいるのだろうか――。

これは異常な事態です。

大人たちはもっと危機感を持った方がいいのではないのでしょうか。(中略)

とにかく特別に悪い学校があるのでしょうか。

特別に悪い子どもがいるのでしょうか。

特別に悪い教師が? 特別に悪い大人が?、

それで特殊な事件が起きているのでしょうか。

そうではなくて、いまの学校という形態自体にひ

ずみが生じていると、考えてははいませんか。

学校の機構そのものが、無理が生じている。

子どもたちが吸っている空気そのものが、病んだものになっている。

ひとのひとはフツールのいい子であったり、熱心でない先生であったりするのには、学校という枠の中ではそれぞれが少しずつひずみをたらされてしまっている。

学校全体がどうやらおかしいようになって、一番敏感な部分に、一番弱い部分に、症状が現われていると考えてははいませんか。*1

石坂さんはそんなふうに考えていて、個々の学校、個々の教師という視点を超えて今の社会の子どもと学校との間にかなり深刻なミスマッチが起きている可能性がある。そこをどうやっていく事が大事なのではないか、というのを述べていらっしやる。私は思えるのです。関心のある方は後でぜひ読んでいただきたいのですが。

子どもの4つの逃げ場がなくなった

実は石坂さんがこの後で言っているもう一つ考えやせられること、それは自分が子どもだった時代と今の時代を比べてみると、いつも足りないものが、欠けているものがあることに気づく。それを一言でいうと子どもの「逃げ場」がなくなっているという表現で昔の子どもにはあった4つの逃げ場がなくなっているという表現をしています。

まず「空間」としての「逃げ場」です。何でもないちよっとした空き地、広場、草の生えている地面やドブ川、路地、別に子どもに遊んでもらうための設備があったわけではあありません。でも勝手に遊んでいても叱られない場所がたくさんあった。大人たちの目線から子どもたちが自由なそんな空間があった、という子どもたちが先ほどの放課後の問題と絡めていうとしても説得力があるので、今私は兵庫県芦屋市の青少年問題協議会の会

